



飯田市
歴研ニュース

News Letter
No. 96
The Iida City Institute
of Historical Research

2018年10月1日 発行

飯田市歴史研究所
〒395-0803
長野県飯田市鼎下山538
TEL 0265-53-4670
FAX 0265-21-1173
E-mail iihir@city.iida.nagano.jp



第16回飯田市地域史研究集会を開催しました

特集 山里社会の歴史とくらし

8月25日（土）と26日（日）に、第16回飯田市地域史研究集会を長野県飯田勤労者福祉センターで開催しました。「山里社会の歴史とくらし」をテーマに、近世以来、飯田・下伊那の山里（山間部村落）がどのような社会を育んできたのかについて考えました。来場者は2日間で延べ156人、市外や県外からも多数ご参加いただきました。

1日目は第1部「山里社会—近世から近代へ—」として、3本の研究報告が行われました。最初に小島庸平氏（東京大学）の「清内路郵便局と山里社会」では、戦間期～戦時期（大正期から昭和初期）の清内路村の動向が郵便局の史料から明らかにされました。続く、吉田ゆり子氏（東京外国語大学）の「近世初期の城・城下町建設と遠山の森林資源」では、木材需要に基づいた幕府の樽木支配の下で、遠山の人びとがどのような社会を形成していたのかが述べられました。また、前澤健氏（高森北小学校）の「17世紀の樽木役の変質—脇坂飯田藩の樽木米を中心に—」では、飯田藩領と樽木役との関係の検討を通して、近世初頭における幕府の伊那郡支配のあり方とその変化が描き出されました。各報告に対する田中光氏（神戸大学）、多和田雅保氏（横浜国立大学）、羽田真也（飯田市歴史研究所）のコメントも踏まえ、最後に討論を行い、近世から現代の山里社会の歴史展開をどう考えるかなど意見を交わしました。



討論の様子

2日目の第2部「山里に向きあう」では、飯田市南信濃・木沢と阿智村清内路の2つの山里を取り上げました。木沢については、多和田真理子氏（國學院大學）の研究報告「文化的中核としての木沢小学校」の後、「木沢の歴史文化を未来につなぐ」と題して、田嶋一氏（國學院大學名誉教授）との対談のかたちで、松下規代志氏（木沢地区活性化推進協議会）から木沢小学校の保存運動に関するお話をうかがいました。また、清内路については、坂本廣徳氏（「清内路—歴史と文化」研究会）の研究報告「近世清内路の村運営—下区有文書の伝来を通して—」に加え、原和信氏（清内路こども会）が「清内路—歴史と文化」研究会の調査と出会って」と題して、こども会の活動紹介とともに、研究会の史料調査に

接して感じたこと、清内路の歴史遺産や将来についての思いを述べられました。討論では、地域の歴史文化における学校の存在意義、それらと史料の関係などについて意見を交わしました。

2日間にわたる研究集会の成果は、来年度の年報にまとめる予定です。

なお、1日目には、にこにこフレンズのみなさまが二胡を演奏し、会場を盛り上げていただきました。



二胡演奏の様子

飯田歴研賞2018 受賞者コメント

飯田市歴史研究所では、前年度に発表された飯田・下伊那の地域史研究に関する優れた作品を、歴研賞として表彰しています。2018年度は、以下の5つの作品を表彰し、地域史研究集会で授賞式を行いました。受賞者の皆様からのコメントを紹介します。

歴研賞 著作部門



豊丘史学会

『豊丘風土記 第24輯—豊丘から満蒙開拓・第二次世界大戦を考える—』
(豊丘史学会、2017年)

此の度、豊丘風土記24輯に「歴研賞」なる貴重な賞を戴き、誠に有難うござ座居ました。24輯は「豊丘から満蒙開拓・第二次大戦を考える」という特集号です。編集の視点は①戦後七十余年過ぎ、体験者が少なくなった現在、記録として残す最後の機会である事、②大正デモクラシーを代表する、比較的進歩的な風土があった飯田・下伊那地方が、なぜ積極的に国策に協力するようになったかの二点です。今回の受賞を重く受け止め、今後の活動に生かしていきたいと思っています。

歴研賞 著作部門



公益社団法人 南信州地域資料センター

『「伊那青年」とその時代』(南信州新聞社出版局、2017年)

今回、思いもかけぬ受賞の知らせに、賛否両論ありましたが、執筆に協力してくれた多くの人々の思いと、執筆者、なによりも、100年以上の時を隔てて、再び世に放たれる『伊那青年』にかけた伊那の青年たちの、篤い思いを受け止めていただきたく、受賞させていただくことになりました。田嶋一氏には、我が意を得た、身にあまる講評をいただきました。消失の危機にある地域の宝を地域に遺していくという一つの目的は果たせましたが、これを機に、関心のある多くの人々が本書及び復刻版『伊那青年』にお目通しいただければ幸いです。

歴研賞 論文部門



上條 宏之氏

「愛国正理社総理坂田哲太郎昌言についての再考」

(『伊那』第65巻第5号、2017年)

自由民権結社と私が考える愛国正理社は、1883年(明治16)2月8日創立され、松方デフレ政策下で増加した貧農層や元結職人まで、少なくとも2000人を越える民衆を組織した。この結社の総理に就任した坂田哲太郎の自由民権論の解明は、極めて重要であると考え、これまで取り組んできた。飯田市歴史研究所が、このたび歴研賞に『伊那』所載の私の論考を推して下さったのは、坂田哲太郎の評価とかわり、有難く嬉しく思う。

奨励賞



佐古 新一氏・佐古 香代子氏

『古文書が語る 帯川村史』(飯田共同印刷、2018年)

思いもかけない受賞の通知を頂きました。

私たち夫婦が『帯川村史』を執筆できたのは、第一に帯川村の先祖が文書を大事に保存した事、第二に帯川住民がまるで旧来の友人のように私達を受け入れてくれた事、第三に平沢里子・興津敬三・山内尚巳先生が古文書の価値と解読を教えて下さったおかげです。

今後も被支配者の目線で古文書を学び、地元集落で生き抜いた先人の熱き想いを文字にして、現代に伝えていきたいと思います。

奨励賞



早苗 寿雄氏

「戦国期武田氏による下伊那地域の領主支配について」

(『信濃』第69巻第11号、2017年)

このたびは、飯田歴研賞奨励賞を賜り、大変光栄に存じます。本論文は、戦国期における下伊那地域の各領主の動向について、武田氏の支配下となり、信濃の「先方衆」として位置づけられ、武田氏の領国経営や軍事行動等にどのような役割を与えられ、関与していたのかを中心に据えて一考を試みたものです。

当時、下伊那で暮らしていた人々が、中世の社会をどのように生き抜いていたのが、さらに研究を進めていきたいと思います。

喬木村、吉澤武彦氏が所蔵する器械製糸工場・喬木館の経営関係文書が、横浜開港資料館の調査と目録作成を終えて、昨年9月に、吉澤家に返却されました。中小規模の営業製糸は浮沈が激しく、その経営資料が、残されることは稀です。それだけに、喬木館・吉澤家文書は、地方製糸の経営実態を究明するうえで、貴重な史料です。

創業者の吉澤定次郎は、明治の初期に上京し、生糸商・田中平八のもとで働きました。その後、定次郎は東京で仲買卸商を営み、明治16年に帰郷し、明治28年に喬木館製糸場を、製糸女工25人規模程度の工場として、起業しました。

喬木館については既に、横浜開港資料館館長の上山和雄氏(『日本近代蚕糸業の展開』、日本経済評論社、2016年)によって、その経営についての分析の大略は果たされています。それによれば、下伊那地方は、全国的にも稀な広範囲に良質の原料繭が産出される地域でした。喬木館は、製糸工程にも改良を重ね、1910年代には、製糸女工150人程度の中規模製糸に発展し、全国的にも優等糸に位置する製糸工場となりました。また、蚕種業を営む養蚕部も松尾村に設置しました。その後、1930年の世界恐慌の渦中で、喬木館は経営困難となり、委託製糸、さらには合資会社として、組織変更を重ねながらも、養蚕部を中心に事業は継続されました。

下伊那地方は、喬木館のように、優等糸としての高評価を得る民間の製糸家が発展する地域であり、第一次大戦以降は、組合製糸も各村に勃興し、優等糸生産を指向するようになる、独自性の強い蚕糸業地域といえます。蚕種業、養蚕業、製糸業、絹織物業といった蚕糸業の関連分野が、地域の人々のどのような力によって営まれたのか、今後とも究明する必要性を、喬木館の事例は提起しています。下伊那には、戦後史も含めて、まだ多くの蚕糸業関連の文書資料をはじめとする産業遺産が残されている可能性があります。今後とも、地域の皆さんとともに、資料の収集、保存を進めていきたいものです。

新スタッフ紹介
福村 任生 研究員

1985年 大阪府生まれ
東京大学・博士(工学)
専門: 建築史・都市史



今年の春に大学院を修了し、8月から研究員になりました。大学院では、北イタリア・ヴェネト地方の都市史研究に取り組んできました。建築史や都市史の研究では、歴史的な建物を調べるだけでなく、過去の文献や地図

から復元図をつくるのが有効な方法論です。日本のような木造文化圏では、古い家屋が現存しないことが多く、また近代化の過程でかつての風景は劇的に変化してきました。豊かな自然環境をもつ飯田下伊那において、都市や風景がどのように形づくられてきたのか、様々なアプローチを駆使して考えていきたいと思っています。

高校生の就業体験
学習を受け入れました

飯田OIDE長姫高校の商業科2年生3名の就業体験学習を、7月17日・18日に実施しました。内容は地域史料目録の作成とプレゼンテーション資料の作成でした。地味な根気を要する作業でしたが、「人類の未来への遺産」づくりとして意義づけ、商業科で習得した情報処理技術を活用して、取り組んでもらいました。同校は飯田市の社会教育と連携し、「地域人教育」を展開しています。この体験もその一環ですが、高校生が、地域文化への理解を深め、地域づくりの課題も視野に収めつつ、進路選択を進める一助としていただければと願っています。



飯田アカデミア2018第85講座

「大地に時を刻む建築のかたち」

10月20日(土)

第1講 13:30~15:00

「柱のある建築とない建築

—世界からみた日本の伝統的な木造建築—

第2講 15:20~16:50

「木造建築の構法からみた柱配置の変遷史

—各地の遺跡と遺構の平面と古代人の建築幾何学—

10月21日(日)

第3講 10:00~11:30

「古代の天文学的な知識と建築の遺構

—柱の配置で時間の経過を表現する方法—

第4講 13:00~14:30

「時のシンボルとしての柱と柱列

—古代ヨーロッパの事例と日本の神社建築—

講師 太田 邦夫さん

(東洋大学名誉教授・ものづくり大学名誉教授)

会場 松尾公民館(飯田市松尾城4012-1)

受講料 500円(資料代)

※1日のみ、1講義のみでもご参加いただけます。受講をご希望の方は歴史研究所までお申し込みください。当日参加も可能です。



石川県 真脇遺跡の環状柱列群

現代の木造建築は壁を主体に建てられますが、日本には昔から柱を多く使う技法がありました。ヨーロッパにも有史前に柱列の遺構があり、日本人はそれらを活かすことで神社などの建築様式を独自に築いてきました。この柱列は、年月の経過を大地に正しく刻むために建てられたというのが私の推測です。長野県を含めた内外の分析事例を順次ご紹介しますので、皆さんと一緒に古代人が抱いた時間の概念とそのモニュメントの造り方に想いを馳せてみたいと思います。

歴研ゼミ&ワークショップ

10月・11月の予定

号講座募集!! スタッフとともに歴史を学んでみませんか。

場所:歴史研究所 研修室(飯田市鼎下山538)

近現代史ゼミ 担当:田中雅孝(調査研究員)

10月13・27日/11月10・24日(第2・第4土曜日) 10:00~11:40

満洲移民研究ゼミ 担当:本島和人(調査研究員)

担当:齊藤俊江(調査研究員)

第85回 10月6日 10:00~11:40 / 第86回 11月10日 13:30~15:00

地域史(川路)ゼミ 担当:羽田真也(研究員)

10月10・24日/11月14・28日(第2・第4水曜日) 18:30~20:40

※地域史(川路)ゼミは、毎回川路公民館で行います。

わが町の建築史ゼミ 担当:樋口貴彦(調査研究員)

※詳しい内容、日時は歴史研究所まで、お問い合わせください。

わが町ゼミは、旧飯田測候所(飯田市馬場町3丁目411)で行います。

思想史ワークショップ 市民の皆さんが自主的に学び合う場

10月3・17日/11月7・21日(第1・第3水曜日) 19:00~20:40

自分史ワークショップ 市民の皆さんが自主的に学び合う場

10月27日 / 11月24日(第4土曜日) 13:20~15:20

ゼミ・ワークショップの詳細・お申し込みについては、歴史研究所までお問い合わせください。TEL:0265-53-4670

定例研究会

「近世座光寺村の組について」

開催日: 10月27日(土)

報告者: 羽田 真也(研究員)

「飯田下伊那の少年農兵隊
一戦時中の食糧増産隊」

開催日: 11月24日(土)

報告者: 原 英章(調査研究員)

いずれも 時間: 14:00~16:00

場所: 歴史研究所 研修室

※定例研究会は公開で行っています。
どなたでもご参加いただけます。

ラウンドテーブルのご紹介

「<満蒙開拓>をアジア東西ないし
欧亜の視野で考えなおす」

開催日: 12月15日(土)

時間: 13:30~16:30

会場: 松本市勤労者福祉センター大会議室

コーディネーター: 板垣雄三(東京大学名誉教授)

上條宏之(信州大学名誉教授)

主催: 信州イスラーム世界勉強会

開所時間: 午前9時~午後5時

休所日: 日曜日・月曜日・祝日・12月29日~1月3日